

# 中学生のレジリエンスと適応との関連モデルの検討 —対人関係に注目して—

清水美恵\*・相良順子\*\*

## Examination of Model for Association of Resilience and Adaptation in Junior High School Students: Focusing on Interpersonal Relationships

Yoshie SHIMIZU\* and Junko SAGARA\*\*

This study investigated a model in which internal working models of junior high school students are directly linked to their resilience while at the same time relationships with family members and teachers have mediating effects on the resilience of the students. Furthermore, resilience was assumed to be influenced by academic competence and sense of life satisfaction. The results of covariance structure analyses confirmed the validity of the model. Differences relating to grade level in school and gender were also examined by simultaneous analysis of multiple populations. The results revealed that positive relationships of junior high school students increase their resilience, which in turn mediates the promotion of life satisfaction and academic competence.

**key words:** resilience, internal working models, family members, teachers, junior high school students

### 問題と目的

思春期は、人生の中でも心理的な面での動揺が大きい時期である。この時期は、第二次性徴の発現による戸惑いや親からの独立に戸惑う孤独感により友人を強く希求する時期であり(西平, 1990), 悩みや考えを語り合えるといった友人関係が重要である。しかし一方で、その友人関係はストレスラーとしても機能し(岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992), 思春期の適応や精神的健康に影響する(岡田, 2008)。たとえば, Rudolph, Hammen, Burge, Lindberg, Herzberg, & Daley (2000) は、8歳~18歳の子どもにお

いて、仲間との葛藤やいじめなどの対人文脈におけるストレスラーは、学業不振などの非対人領域のストレスラーよりも抑うつとの関連が強いことを示している。このように、思春期では、いじめなど友人関係によるストレスを受けやすく、ストレスフルな経験にさらされやすいことが考えられる。しかし、子どもはストレスフルな状況下におかれて一時的に不適応な心理状態に陥っても、自身でそれをうまく乗り越えることが必要である。その逆境を乗り越えるときに必要とされる要因の一つにレジリエンスがある。

レジリエンスとは、困難な環境にもかかわらず

\* 聖徳大学児童学研究科児童学専攻

Major in Child Studies, Seitoku University Graduate School, 550 Iwase, Matsudo-shi, Chiba 271-8555, Japan

\*\* 聖徳大学児童学部

Department of child studies, Seitoku University, 550 Iwase, Matsudi-shi, Chiba 271-8555, Japan

まく適応する過程・能力・結果と定義され(Masten, Best, & Garmezy, 1990), 子どもの心理的健康を前向きに捉える概念である。子どもが適応を維持していくために, 子どものレジリエンスを高める支援が重要である。中学生のレジリエンスに効果をもつ要因について検討した研究では, たとえば, レジリエンスはパーソナリティと関連があること(石毛・無藤, 2006)や, レジリエンスとソーシャル・サポートとの間に正の相関があることが示されている(石毛・無藤, 2005)。また, 中村・内田(2007)は, 他者への愛着がレジリエンスに影響を及ぼすことを報告している。これらの研究は, 個人の気質という個人要因やソーシャル・サポートといった環境要因が個別に検討されている。

しかし, 近年, レジリエンスの促進に個人要因と環境要因との相互作用が重要であるとの指摘がある(e.g., Luthar, Cicchetti, & Becker, 2000; Masten, 2001)。そこで, 本研究では, 個人要因と環境要因の両者がレジリエンスにどのように影響を及ぼすか包括的に検討を行う。

レジリエンスは, 子どものもつ特性と家族や地域社会との相互作用により高められる(Masten, 2001)という知見を踏まえると, レジリエンスを高めるために, 特に, 対人関係は重要であるといえる。中学生期の対人関係は, 親からの離脱が始まり, 親以外の大人や友人との関係が拡大していく一方で, 親からの守りを依然として必要とするなど, さまざまな対人関係の影響性が絡み合っている。このことを考慮すると, 発達途上にある中学生の対人関係に着目する必要がある。そこで, 本研究では, 対人関係に関連する個人要因として内的作業モデル(Internal Working Models; 以下 IWM と表記)を, 環境要因として家族関係と教師関係を取り上げる。

まず, 中学生の内在化された IWM とレジリエンスとの関連について述べる。IWM は, 自己と愛着対象との相互的な関係性において発達過程の中で形成された心的表象であり(Bowlby, 1973), 対人関係に関するスキーマとして内在化された概念である(Krakauer, 2014)。

IWM は, 外界の情報を取り入れ, 解釈し, 行動に移すといった情報処理を導く機能がある(Bowlby, 1980)。このことから, 内在化された IWM が安定したものであると, 対人関係における情報処理

(Dykas & Cassidy, 2011)によって, 人との相互作用におけるさまざまな側面に作用し, 困難を乗り越える能力を高めると考えられる。ゆえに, 中学生の内在化された IWM は, レジリエンスを高める重要な内的要因といえる。これまでの研究から, 安定的な IWM が形成されれば, 逆境に遭遇したとしてもレジリエンスを高めることができると推測される。

近年, IWM の変化に着目した研究が報告されている。粕谷(2016)は, 9ヶ月間の縦断研究において, 調査された中学生のうち 38% の生徒の IWM は, 不安定型や回避型から安定型へ変化することや, 安定型から不安定型や回避型へ変化することを明らかにしている。三原(1999)によると, 過去に不安定な IWM が形成されても, 新たなアタッチメント対象との相互作用を積み重ねることができれば安定した表象モデルが形成されるという。また, 小学生や中学生はすでに IWM が形成されており, その IWM が一般的な対人関係全体に表出されると考えられている(崎田・高坂, 2018)。これらの知見から, 中学生の内在化された IWM が基本的対人関係を捉える枠組みとなることが推測される。

さらに, 家族や教師との関係は, レジリエンスが作用するための防御要因として重要であると指摘されている(Masten & Barnes, 2018)。本研究ではこの点にも着目し, 家族関係と教師関係がレジリエンスにどのように影響を及ぼすか検討する。

まず, 家族関係とレジリエンスとの関連について述べる。思春期にある中学生は, 親からの離脱や依存性の払拭に重点を置いているものの, 根底には親に見捨てられることへの恐れがある(西平, 1990)。そのため, 子どもが親に受容されていると思えるような家族の配慮が必要といえよう。子どもにとっての良好な家族関係とは, 子どもが家族の中で自分の存在が認められていると感じたり, 安心できると感じられる関係である。このような家族関係を捉えた尺度に家族自己有用感尺度(石本, 2010)がある。家族自己有用感とは, 家族との関係に対して, 自分は役に立っていると感じる感覚である(石本, 2010)。子どもは, 自分が役に立っていると思えることで, 子どもにとって家庭が心地よい空間になり, 安心できる家族との関係を保つことができる。そのような家族関係がレジリエンスに影響を及ぼすことが推測される。実際, 三沢・長山・松田・石山(2015)は, 家族

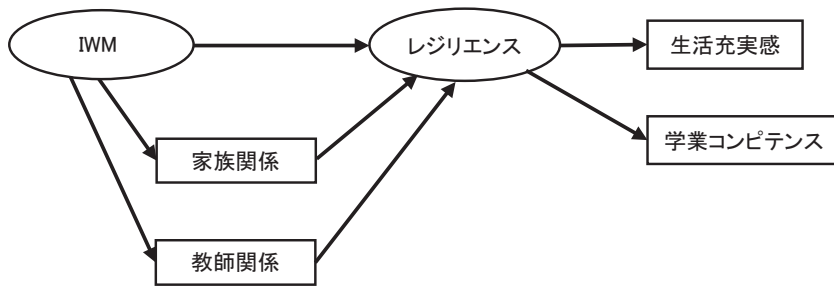


Figure 1 仮説モデル

有用感尺度(石本, 2010)を用いて, 中学2年生の家族有用感がレジリエンスに関連することを明らかにしている。三沢他(2015)の研究では, 中学2年生だけを対象に調査しているので, 学年差は明らかにされていない。しかし, 中学生の親への信頼感は学年ごとに異なることが明らかにされている(中井, 2013)ことから, 中学生の家族関係とレジリエンスとの関連においても学年差があると推測される。よって, 発達の観点から, 家族関係とレジリエンスとの関連を検討する必要があると考える。

次に, レジリエンスが作用するための要因として, 家族関係以外では健全な学校環境がある。中学生の学校環境における重要な人物との関係として, 教師との関係が挙げられよう。それは, 唯の教師関係ではなく, 子どもの教師への信頼感が必要である。そもそも信頼感とは, 自分自身や他人を安心して信じ, 頼る気持ちである(天貝, 2001)。また, 教師への信頼感とは, 教師との関係に対する自信や安心感であり(中井・庄司, 2006), 中学生の教師に対する信頼感が適応感に影響することが報告されている(中井・庄司, 2008)。このことから, 教師への信頼感が, レジリエンスを高めると推測できる。そこで本研究は, レジリエンスとの関連要因に, 教師関係として教師への信頼感を取り上げる。これらの知見から, たとえ, 中学生のすでに内在化されたIWMが不安定であっても, 子どもの重要な人物である親や教師との関係性において情緒の安定が可能となれば, レジリエンスが高められることが推測される。

以上, 中学生の対人関係に注目し, IWM, 家族関係, 教師関係とレジリエンスとの関連を検討する必要性について説明してきた。さらに, 本研究は, レジリエンスを“子どもが心理的不健康になっても, 自身でそれを乗り越えて心理的健康を保ち, 適応を維持

していく力”と位置づけている。そのため, 適応を含めた包括的なレジリエンス関連モデルを検証する必要がある。本研究における適応とは, 子どもの生活において, 適応的な心理的健康を維持することを指す。本研究では, 適応として, 生活充実感(高橋・竹嶋・青木, 2013)と学業コンピテンス(桜井, 1983)を取り上げる。

高橋・竹嶋・青木(2013)は, レジリエンスの類似要因として生きる力を位置づけ, 生きる力と生活充実感との間に正の関連を示している。このことから, レジリエンスは生活充実感に影響を及ぼすと考えられる。また, 学業コンピテンスとレジリエンスとの関連においては, Xi, Zuo, & Sang (2011)は, 児童期の子どもを対象に, レジリエントな子どもはそうでない子どもより, 学習に対する認知されたコンピテンス(Harter, 1982)が高いことを示している。学業コンピテンスとは, 学習に対する認知された有能さ(桜井, 1983)を指し, 中学生のレジリエンスと学業コンピテンスは関連を示すと推測できる。よって, 本研究では, レジリエンスは生活充実感や学業コンピテンスにどのように影響を及ぼすか検討する。

以上のことから, 本研究では, IWMがレジリエンスに直接関連することに加え, 家族関係や教師関係を媒介してレジリエンスと間接的に関連し, さらに, レジリエンスは生活充実感と学業コンピテンスに関連するという仮説モデル(Figure 1)を作成した。Figure 1の仮説モデルを検証することが本研究の第1の目的である。

なお, レジリエンスを扱った研究として, Rodriguez-Fernandez, Ramos-Daz, & Fernandez-Zabala (2016)の研究がある。Rodriguez-Fernandez et al.(2016)は, 思春期の子どもの自己概念を介したソーシャル・サポートとレジリエンスとの関連を検

討しているので、レジリエンスへの効果は、ソーシャル・サポートによるものか、あるいは自己概念によるものが不明瞭である。そのため、子どもの健康を支える介入が難しくなるといえる。したがって、本研究のように、レジリエンスに関連する要因を含めた Figure 1 の包括的なモデルを検証することは、中学生の良好な対人関係形成を支え、心理的健康の維持、さらに適応に結びつけるための支援の手がかりになると考える。

本研究の第2の目的は、レジリエンスとその関連要因について学年や性別による違いを検討することである。石毛・無藤(2005)は、レジリエンスの関係志向性得点および楽観性得点は性差があることを示している。また、加藤・太田・松下・三井(2014)は、中学生の親子関係や教師関係における発達の変化を検討し、親や教師との関係の良さが1年生から2年生の時期に低下する傾向にあることを示している。これらのことから、中学生のIWM、家族関係、教師関係とレジリエンスとの関連においても、学年や性別により異なることが推測される。

そこで、本研究では、中学生の学年や性別で Figure 1 のモデル内のパス係数に違いが見られるか検討する。その結果として、中学生の心理的健康を支えるためのより具体的な関わりのヒントが見つかる可能性が高い。以上を踏まえて、中学生のレジリエンスとその関連要因を検討するために Figure 1 の仮説モデルを設定し、多母集団同時分析を行う。

## 方 法

### 調査対象

公立中学校1校の1年生～3年生541名(1年生男子100名、女子82名、2年生男子81名、女子91名、3年生男子96名、女子91名)を対象とした。調査は、2016年4月中旬～5月初旬に実施した。

### 手続きと倫理的配慮

調査は質問紙を用い、クラス担任教師による一斉方式で実施された。調査の実施にあたり、学校長より了解を得た後、研究の目的、方法、学習評価等の不利益な対応は受けないこと、回答は任意であり、得られたデータは統計的に処理し、回答が特定されることがないことを学級担任により口頭および文書で提示してもらい、対象生徒の回答をもって調査協力を得たものとした。本研究は、聖徳大学の倫理委員会の承

認(H27 U057)を得ている。

### 調査内容

**レジリエンス尺度** 石毛・無藤(2006)のレジリエンス尺度を用いた。この尺度は、問題解決への意欲や他者に内面の共有を求める傾向や物事をポジティブに考える傾向を測定する尺度で、「意欲的活動性」「内面共有性」「楽観性」の3下位尺度19項目で構成されている。回答は、「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で求めた。

**IWM尺度** 粕谷・河村(2005)の中学生用IWM尺度を使用した。この尺度は、「安定」「不安/アンビバレント」「回避」の3下位尺度17項目で構成されている。「安心」(項目例：私は、はじめて会った人とでもうまくやっていける自信がある)、「不安/アンビバレント」(項目例：友だちが私を好いてくれているのではないかと思うことがある)、「回避」(項目例：私は、親しくされると居心地の悪さを感じる)がある。回答は、「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で求めた。

**家族関係** 石本(2010)の家族自己有用感尺度の項目から、中学生は家族に必要とされているや関心をもたれていると感じることを表した「家族に関心を持たれている」「家族に必要とされている」「家族に自分の存在を認められている」の3項目に、子どもが信頼する家族関係として、子どもと家族とのコミュニケーションは重要と捉え、松浦・竹下(2008)の中学生の心理的健康と有意な関連が示された「困ったことは家族に相談しない」の1項目とその反対の表現として「家族と対話をする」を追加し5項目を用いた。回答は、「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で求めた。尺度の信頼性は十分な内的整合性を有しているとはいえない( $\alpha=0.64$ )が、主成分分析の結果、1成分(固有値=2.84、累積寄与率=56.81%)であることが示された。

**教師関係** 中井・庄司(2006)が作成した教師に対する信頼感尺度の下位尺度である「安心感」から、本研究は、質問紙全体の項目数から中学生が回答に適應できる項目数を考慮し、項目の表現に類似性があると判断した項目を除き、「先生と話していると困難なことに立ち向かう勇気が湧いてくる」「私が不安なとき、先生に話を聞いてもらおうと安心する」「先生にならいつでも相談できると感じる」「私が悩んでいるとき、先生が私を支えてくれていると感じる」「先生

Table 1 各尺度得点における学年と性別の2要因分散分析結果 (n = 541)

	1年生 (182)				2年生 (172)				3年生 (187)				F値		多重比較	
	男子 (100)		女子 (82)		男子 (81)		女子 (91)		男子 (96)		女子 (91)		学年	性別		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F値	F値		
レジリエンス	29.26	.51	29.01	.56	26.38	.56	26.88	.53	26.12	.52	26.55	.53	16.79***	n.s.	n.s.	1>2, 3
意欲的活動性	12.17	.33	13.63	.37	11.25	.37	13.34	.35	10.81	.34	13.71	.35	n.s.	56.27***	n.s.	男子<女子
内面共有性	6.63	.19	6.32	.21	5.98	.21	6.18	.20	5.94	.19	5.86	.20	4.53*	n.s.	n.s.	1>3
IWM																
安定	14.57	.38	13.59	.42	13.22	.42	12.90	.40	12.63	.39	12.16	.40	9.02***	n.s.	n.s.	1>2, 3
不安/アソビバレント	9.07	.37	11.67	.41	9.92	.42	11.73	.39	11.31	.38	12.54	.39	8.61***	34.95***	n.s.	1, 2<3 男子<女子
回避	6.35	.28	6.83	.31	7.18	.31	7.58	.30	7.87	.29	7.34	.30	6.49***	n.s.	n.s.	1<2, 3
家族関係	13.74	.27	14.76	.30	13.29	.30	13.87	.28	12.76	.27	13.67	.28	6.96***	13.01***	n.s.	1>3 男子<女子
教師関係	11.00	.36	10.87	.39	8.92	.40	8.62	.37	9.33	.36	9.28	.37	17.73***	n.s.	n.s.	1>2, 3
生活充実感	26.48	.52	26.05	.58	25.20	.58	23.87	.55	23.10	.53	22.92	.55	17.70***	n.s.	n.s.	1>2, 3 2>3
学業コンピテンス	15.10	.41	15.41	.45	13.72	.46	12.64	.43	12.95	.42	12.05	.43	22.48***	n.s.	n.s.	1>2, 3

注。( )内は人数を表す。\*\*\*p&lt;.001 \*\*p&lt;.01 \*p&lt;.05 多重比較はBonferroni法による。

は私の立場で気持ちを理解してくれていると思う」の5項目を用いた。回答は、「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で求めた。

**学業コンピテンス尺度** 桜井(1983)は, Harter(1979)の認知されたコンピテンス尺度の日本語版を作成している。この尺度は, Cognitive Competence, Physical Competence, Social Competence, General Competenceの4領域で構成されている。本研究は, 学業コンピテンスを測定するため, Cognitive Competence 7項目を用いた。回答方法は, 「1. いいえ」～「4. はい」の4件法である。

**生活充実感尺度** 生活がすごく楽しいと感じるなど, 生活に対する満足感や肯定的意識を表す項目で, 高橋・竹嶋・青木(2013)の生活充実感尺度の9項目を用いた。回答は, 「1. いいえ」～「4. はい」の4件法で求めた。

#### 分析の手続き

本研究は, まず, 仮説モデルを検証するために共分散構造分析を行い, 次に, 学年と各学年の性によるモデルの検証と比較を行うために多母集団同時分析を行った。なお, 適合度指標としてGFI, AGFI, CFI, RMSEA, AICを用いた。GFI, AGFI, CFIの値の上限は1.0, RMSEAの値は0.0に近いほど適合度が良く, AICの値は小さいほど乖離度の小さいよいモデルであると判断される(豊田, 2005)。AICは複数のモデルにおいて最良のモデルを選択するときを用いる(田部井, 2011)ので共分散構造分析では除外した。

さらに, モデルの修正では, 因子間相関は両者にだけ影響する共通要因があると推測され, 両者の誤差変数間に共分散を仮定した(豊田, 2004)。判断基準は, 各変数間の相関係数 $r > .40$ とした。「家族関係」と「教師関係」との間には対人関係を捉えるものとして共通性があることを考慮した。分析にはSPSS Ver.22.0とAmos Ver.22.0を用いた。

## 結果

#### 仮説モデルの検証

Figure 1に示した仮説モデルにおける, 各変数の基本統計量(Table 2を参照)と学年差と性差を算出した(Table 1)。学年と性を要因とする2要因分散分析を行った結果, 学年では, レジリエンスの「内面共有性」以外の各尺度得点は学年で違いがあることが

Table 2 各尺度の相関係数と平均値, 標準偏差 (n = 541)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	平均値	SD	$\alpha$
レジリエンス													
1. 意欲的活動性	—										27.38	5.19	.87
2. 内面共有性	.29**	—									12.47	3.50	.83
3. 楽観性	.46**	.25**	—								6.16	1.88	.77
IWM													
4. 安定	.39**	.23**	.47**	—							13.19	3.89	.82
5. 不安/アンビバレント	-.15**	.04	-.30**	-.30**	—						11.02	3.86	.84
6. 回避	-.16**	-.22**	-.15**	-.17**	.35**	—					7.19	2.85	.80
7. 家族関係	.32**	.27**	.26**	.25**	-.21**	-.12**	—				13.66	2.74	.64
8. 教師関係	.30**	.24**	.23**	.20**	-.17**	-.11**	.35**	—			9.68	3.67	.92
9. 生活充実感	.35**	.23**	.45**	.48**	-.45**	-.32**	.46**	.41**	—		24.59	5.40	.88
10. 学業コンピテンス	.43**	.12**	.20**	.31**	-.19**	-.10*	.36**	.30**	.35**	—	13.63	4.25	.85

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

示された。性では、レジリエンスの「内面共有性」、IWMの「不安/アンビバレント」、「家族関係」の得点は女子が男子より有意に高く示された。

次に、各尺度間の相関係数を算出した(Table 2)。分析の結果、仮説モデルで推定した各変数のほとんどに有意な係数が確認された。そこで、仮説モデルについて共分散構造分析を行った。分析の結果、関連モデルにおける各適合度の指標 (GFI = .91, AGFI = .85, CFI = .81, RMSEA = .12) は、十分な値といえなかった。モデルの修正では、Table 2 で示された相関係数  $r > .40$  を基準に誤差変数間に共分散を仮定し適合度が高くなる時点まで分析を繰り返した。「家族関係」と「教師関係」との間の相関係数は  $r = .35$  であったが、両者は対人関係を捉えるものとして共通性があることを考慮した。最終的には、「安定」と「楽観性」(e1 と e6)、「意欲的活動性」と「楽観性」(e4 と e6)、「意欲的活動性」と「学業コンピテンス」(e4 と e8)、「楽観性」と「生活充実感」(e6 と e7)、「家族関係」と「教師関係」(e9 と e10) のそれぞれの誤差変数間に共分散を仮定し検証を行った。その結果、RMSEA の値はグレーゾーンの範囲であったが、モデルの適合度は、GFI = .95, AGFI = .90, CFI = .90, RMSEA = .09 で概ね許容できる結果が得られた (Figure 2)。このことから、IWM がレジリエンスと直接関連するとともに、家族関係や教師関係を媒介してレジリエンスと関連し、さらに、レジリエンスは生活充実感と学業コンピテンスに関連するというレジリエンス関連モデルの妥当性が示された。

### 仮説モデルの学年および性別による多母集団同時分析

仮説モデルを基に学年と各学年の性による多母集団同時分析を行った。各分析において、1年生、2年生、3年生および男女の母集団に対し、学年と性の群間の等質性を検討する配置不変を設定した。パラメータ値が有意であった学年モデルと性別モデルに対しては、等値制約を課し、制約を課したモデルと制約を課さないモデルの比較を行った。その結果、制約を課したモデルの適合度は (学年: GFI = .92, AGFI = .86, CFI = .92, RMSEA = .05, AIC = 379.08) (性別: GFI = .93, AGFI = .87, CFI = .91, RMSEA = .06, AIC = 281.20) であり、制約を課さないモデルの適合度は (学年: GFI = .93, AGFI = .87, CFI = .90, RMSEA = .05, AIC = 366.81) (性別: GFI = .94,

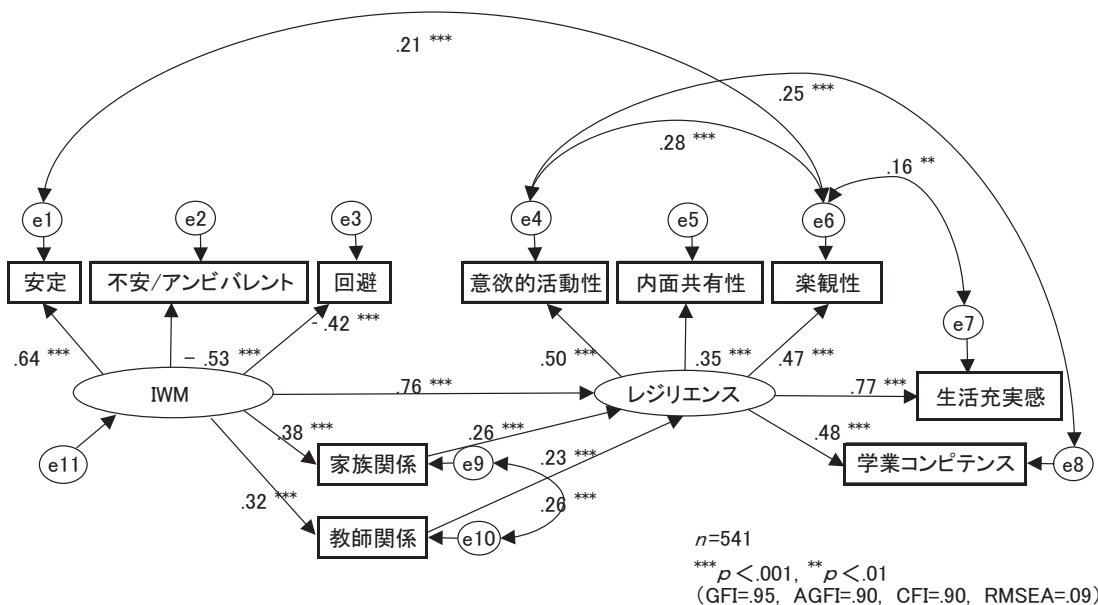


Figure 2 レジリエンス関連モデルの共分散構造分析の結果

AGFI = .89, CFI = .91, RMSEA = .06, AIC = 276.98)であった。GFI, AGFI, RMSEA の値では差がほとんどみられなかったが、制約を課さないモデルの方が AIC の値が低く、いずれの適合度指標でも十分な値が得られたため、このモデルを採用した。学年および性別におけるモデルの結果を Figure 3 に示す。

まず、学年について分析した結果、IWM から教師関係へのパス (1年生と2年生は有意な正のパス、3年生のパス係数は有意ではない)、教師関係からレジリエンスへのパス (3年生は有意な正のパス、1年生と2年生パス係数は有意ではない)、家族関係からレジリエンスへのパス (1年生は有意な正のパス、2年生と3年生のパス係数は有意ではない) に違いがあることが示された。

次に、性別モデルを分析した結果、家族関係からレジリエンスへのパスは、男子は有意な正の関連を示したが、女子は有意なパス係数ではなかった。さらに、レジリエンスから生活充実感および学業コンピテンスへのパス係数は、学年および性別のいずれも有意な正の関連を示した。

## 考 察

本研究は、レジリエンスに影響を及ぼす要因とし

て IWM, 家族関係, 教師関係に注目し、IWM はレジリエンスに及ぼす直接的な影響に加え、家族関係や教師関係を介した間接的な影響を及ぼすとともに、さらにレジリエンスは生活充実感と学業コンピテンスに影響を及ぼすというレジリエンス関連モデルを検証した。その結果、すべてのパスにおいて一貫して正の関連が示されたため、モデルは支持されたといえる。本研究の結果から次のことがいえる。

まず、本研究では、レジリエンスを高めるために内在化された IWM, 家族関係, 教師関係が重要であることが示された。中学生は、発達の過程で喜びや悲しみなど互いに共感しあうことで家族、教師、友人など子どもを取り囲む重要な他者との間に援助を得られる信頼関係を形成し、その結果として、困難な状況に直面しても、それを乗り越え適応することができる。また、IWM がレジリエンスに強い影響を及ぼしていた。この結果から、安定的な IWM の形成は、レジリエンスを高めるために重要であることが示唆された。ゆえに、IWM が安定でない生徒に大人は、生徒の情緒の安定を導くよう働きかけていくことが必要であると言えよう。

さらに、レジリエンスは生活充実感と学業コンピテンスに正の関連を示した。この結果は、Rodriguez-Fernandez et al.(2016) によるレジリエンスが主観

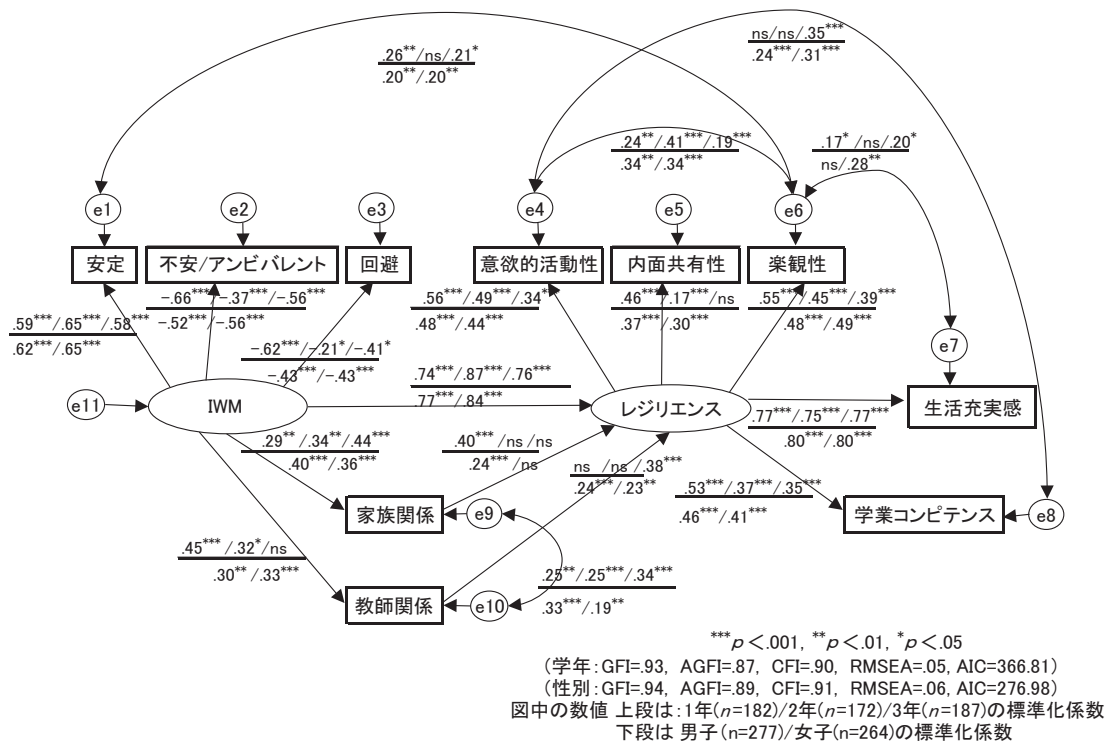


Figure 3 学年および性別における関連モデルの共分散構造分析の結果

的幸福に影響することを示した結果に類似するものといえる。中学生は、学校環境の変化に伴い学業や対人関係などさまざまな出来事を経験する。そのような状況の中で子どもが適応的な生活を維持し、学校生活の満足感や学力に対する有能感を高めるには、レジリエンスを高めることが重要であると示唆される。このような本研究で得られた結果は、中学生の心理的健康を支えるという視点において意義があると思われる。

仮説モデルの学年および性差

学年および性別によるモデルの差異を検討するために多母集団同時分析を行った。その結果、家族関係からレジリエンスへのパス係数、IWMから教師関係へのパス係数、教師関係からレジリエンスへのパス係数において、学年と性で有意な差が確認された。まず、学年別では、家族関係からレジリエンスへのパスは、1年生は有意な正の関連を示した。中学生は、親からの分離時期であるとはいえ、1年生はまだ親の保護を求める時期である。特に本研究の調査時期を考慮すると、1年生は中学校生活をスタートさせたばかりである。このような環境の変化に伴い、子ども

の心理状態は不安定になりやすいことが考えられる。そのため、子どもにとってありのままにいられる家族との関係が重要であり、子どもは家族との絆によって適応していくといえる。

1年生のIWMから教師関係へのパスは有意であった。一方、教師関係からレジリエンスへのパスは有意でなかった。本研究は、4月中旬から5月初旬に調査を実施しており、入学からそれほど時間が経過していない状態である。このような環境移行期にある1年生の安定的なIWMは、教師との関わりに影響を及ぼし、その結果、1年生は教師に期待を寄せ、教師に対する信頼感を高めようとするものの、この時期ではまだ、教師は生徒の逆境を乗り越えるための援助者という関係性が形成されにくいと推察される。よって、教師は生徒とのポジティブな相互作用を積み重ねていくことが必要といえるだろう。

3年生の場合、IWMから教師関係へのパスは有意ではなかった。この点については、3年生は教師への信頼感が1年生や2年生より低いことが報告されている(中井・庄司, 2008)ことから、心理的距離が遠いのかもしれない。しかし、教師関係がレジリエンス



に影響を及ぼすという結果は、受験期にある3年生の場合、学業や進路相談などを機に、教師との相互的な関わりが増え、それを通してレジリエンスが高められると考えられる。

ところで、2年生は、IWMから家族関係および教師関係へのパスは有意な関連を示したが、家族関係および教師関係からレジリエンスへのパスは有意ではなかった。2年生は、新奇性追求(e.g., “どんな決まりもなしで自分たちのしたいことをしていい時が好き”など)の得点が高いことが示されている(石毛・無藤, 2006)。また、Table 1において、2年生の場合、レジリエンスの下位因子である内面共有性の得点が1年生より低かった。さらに、家族関係の得点や教師関係の得点においても、2年生が1年生より有意に低いことが示された。2年生は、親や教師への反抗といった現象が表れやすい時期であるのかもしれない。そのことによって、家族や教師に内面的なつながりを求めて何かを成し遂げようとする傾向が低められることが考えられる。中学2年生は他の学年と比べて、他者の支援の影響が反映しにくい学年といえよう。

次に、性別によるモデルを検討した結果、家族関係からレジリエンスへのパスに関連の違いが確認され、男子は有意に正の関連を示したが、女子は有意なパス係数ではなかった。Table 1において、家族関係の得点は男子が女子より有意に低いことが示されている。男子の場合、家族関係の平均得点が低い中でも、よい家族関係がレジリエンスを高める要因になっているのかもしれない。思春期にある中学生の時期は、レジリエンスを高めるために家族関係が重要であり(Masten & Barnes, 2018)、安全基地としての親の存在が、男子は女子よりも強い傾向があると考えられよう。

一方、レジリエンスから生活充実感および学業コンピテンスへの影響については、学年および性差がないことが確認された。このことから、中学生の適応を維持・向上させるためには、レジリエンスを高める支援が必要といえる。

以上の知見により明らかになったことは、家族関係や教師関係を媒介したIWMとレジリエンスとの関連において、学年および性差が示されたことである。よって、中学生のレジリエンスを高めるために、親や教師は、子どもとの情緒の安定を導く調和的な

関係性を保ち、発達段階や性別に応じた対応をする必要があることが示唆された。本研究では、中学生の心理的健康に関連する要因について、レジリエンスに焦点を当ててレジリエンスの関連モデルを検討した。この結果は、中学生の心理的健康に携わる際に、子ども自身のレジリエンスを高めるための重要な情報を提供したという点で意義があるものといえる。しかし、レジリエンスを高める要因は、対人関係以外の要因も考えられるため、レジリエンスが作用するための要因については詳細に検討していくべきであろう。

最後に、本研究の限界について述べる。まず一つは、本研究は対象校が1校であったことから一般化の限界が挙げられる。学校環境や地域性を考慮し、今回の結果をより普遍的な知見として確立するためには、今後さらに多様で広範囲な学校のデータを用いて検討していく必要がある。二つ目は、本研究は、ある一時点のデータをもとに解析を行ったものであるため、時間経過による変化を考慮した因果関係について言及できない。今後は、中学生の発達の連続的な追跡データの検討を行い、IWMや、家族や教師関係とレジリエンスとの因果関係を明らかにすることで、レジリエンスを高める要因をより明確に示すことができると考える。

## 引用文献

- 天貝由美子 2001 信頼感の発達心理学 思春期から老年期に至るまで 新曜社。
- Bowlby, J. 1973 *Attachment and loss: 2 Separation*. New York: Basic Books. (黒田実朗ほか訳. 1977 母子関係の理論II: 分離不安, 岩崎学術出版社)。
- Bowlby, J. 1980 *Attachment and loss: 3 Loss, Sadness and Depression*. London: Hogarth Press. (黒田実朗ほか訳. 1981 母子関係の理論III: 対象喪失, 岩崎学術出版社)。
- Dykas, M. J., & Cassidy, J. 2011 Attachment and the processing of social information across the life span: theory and evidence. *Psychological bulletin*, **137**, 19-46.
- Harter, S. 1979 *Perceived competence scale for children (manual)*. University of Denver.
- Harter, S. 1982 The perceived competence scale for children. *Child Development*, **53**, 87-97.
- 石毛みどり・無藤 隆 2005 中学生における心理的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して— 教育心理

- 学研究, **53**, 356-367.
- 石毛みどり・無藤 隆 2006 中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連 パーソナリティ研究, **14**, 266-280.
- 石本雄真 2010 青年期の居場所感が心理的適応, 学校適応に与える影響 発達心理学研究, **21**, 278-286.
- 柏谷貴志 2016 中学生の内的作業モデルの変化と学校適応感との関連 応用心理学研究, **41**, 299-307.
- 柏谷貴志・河村茂雄 2005 中学生の内的作業モデル把握の試み—尺度の信頼性・妥当性の検討— カウンセリング研究, **38**, 141-148.
- 加藤弘通・太田正義・松下真実子・三井由里 2014 思春期における思考の発達と自己および人間関係への影響—批判的思考態度についての縦断調査をもとに— 子ども発達臨床研究, **5**, 21-30.
- Krakauer, S. Y. 2014 Must Internal Working Models be Internalized? A Case Illustrating an Alternative Pathway to Attachment. *Journal of Family Violence*, **29**, 247-258.
- Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. 2000 The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, **71**, 543-562.
- Masten, A. S. 2001 Ordinary Magic: Resilience Processes in Development. *American Psychologist*, **56**, 227-238.
- Masten, A. S., & Barnes, A. J. 2018 Resilience in Children: Developmental Perspectives. *Children (Basel, Switzerland)*, **5**, 98. <http://dx.doi.org/10.3390/children5070098>; access 2018.7.27. doi: 10.3390/children5070098.
- Masten, A. S., Best, K. M., & Garmezy, N. 1990 Resilience and development: Contributions from the study of children who overcome adversity. *Development and Psychopathology*, **2**, 425-444.
- 松浦英夫・竹下達也 2008 小中学生の心の健康と生活習慣・家庭環境 学校保健研究, **49**, 417-424.
- 三原理恵 1999 愛着理論から見た発達病理と精神病理 東京大学大学院教育学研究科紀要, **39**, 327-338.
- 三沢徳枝・長山知由理・松田典子・石山みづ美 2015 中学生のレジリエンスと家族コミュニケーションの関連 日本家庭科教育学会誌, **57**, 283-289.
- 中井大介 2013 中学生の親に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, **24**, 539-551.
- 中井大介・庄司一子 2006 中学生の教師に対する信頼感とその規定要因 教育心理学研究, **54**, 453-463.
- 中井大介・庄司一子 2008 中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連 発達心理学研究, **19**, 57-68.
- 中村直美・内田一成 2007 中学生における他者への愛着とレジリエンスとの関連について—性差についての臨床心理学的研究— 上智教育大学心理教育相談研究, **6**, 1-11.
- 西平直喜 1990 成人になること—生育史心理学から 東京出版会.
- 岡田 涼 2008 親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築 教育心理学研究, **56**, 575-588.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310-318.
- Rodriguez-Fernandez, A., Ramos-Diaz, E., & Fernandez-Zabala, A. 2016 Contextual and psychological variables in a descriptive model of subjective well-being and school engagement. *International Journal of Clinical and Health Psychology*, **16**, 166-174.
- Rudolph, K. D., Hammen, C., Burge, D., Lindberg, N., Herzberg, D., & Daley, S.E. 2000 Toward an interpersonal life-stress model of depression: The developmental context of stress generation. *Development and Psychopathology*, **12**, 215-234.
- 嶋田亜紀穂・高坂康雅 2018 中学1年生における内的作業モデルが登校回避感情に及ぼす影響と学級機能との関連 教育心理学研究, **66**, 276-286.
- 桜井茂男 1983 認知されたコンピテンス測定尺度(日本語版)の作成 教育心理学研究, **31**, 245-249.
- 田部井明美 2011 SPSS 完全活用法 共分散構造分析(AMOS)によるアンケート処理 第2版, 東京図書株式会社.
- 高橋智子・竹嶋飛鳥・青木多寿子 2013 児童の生活体験・生活充実感と「生きる力」の関連について 学習開発学研究, **6**, 3-9.
- 豊田秀樹 2004 共分散構造分析[入門編]—構造方程式モデリング— 朝倉書店.
- 豊田秀樹 2005 共分散構造分析[疑問編]—構造方程式モデリング— 朝倉書店.
- Xi, J. Z., Zuo, Z. H., & Sang, B. 2011 Perceived social competence of resilient children. *Acta Psychologica Sinica*, **43**, 1026-1037.

(受稿: 2019.3.12; 受理: 2019.7.24)